

2021年度横浜ナザレン教会・受難週主日(3/28)礼拝
「滅びの中の救い」ルカ福音書第21章20節から24節

ルカによる福音書21: 20 「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。21 そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。22 書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。23 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

1 報復の日

最近、自分が教会に通い始めた頃に聞いたある質問を思い出しました。熱心なクリスチャンが運営するインターネットサイトに書き込まれていた次のような質問です。「私は子供の頃からの虚弱体質です。体が辛い時はどうしても自分が一番となり、家族を愛する余裕がもてません。弱い事は罪ですね。」この書き込みを見た時、「イエス・キリストの父なる神は、病や弱さを罪とするような、冷たい神なのだろうか。果たして病気が罪なのだろうか？」と反発を覚えました。やがて考え込んでしまいました。私自身の中にも、なすべき事が出来ない自分を受け入れられない、そんな自分をダメな人間だという思いもあり、その思いは、「弱い事は罪だ」という考えと根っこで繋がっている事に気づかされたからです。私は無意識に「弱い事は罪だ」と思っていたのです。その時から、「弱さとは罪なのか？罪とは一体何なのだろう？」と考え始めました。

さて、今日の聖書テキストは、「報復の日」「神の怒りがくだる」等の激しい表現で、神の都エルサレムの滅亡を語る主イエスが描かれています。読むと気持ちが落ち込むような所ですが、この聖書テキストの背後にこそ、罪とは何か？という問いかけの答えがあるように思います。何故なら、22節の「報復の日」という言葉には、「刑罰の日」という意味があるからです。主イエスは、エルサレム滅亡の日、ユダヤの人々に下ったのは、彼らの罪の結果としての刑罰だと仰っています。今日のテキストで語られるのは、その罪ゆえの神の怒りです。そして人々の罪が語られているというのは、その罪のために苦しまれたイエス・キリストの十字架が語られているということ。一見恐ろしいテキストに目を凝らせば、十字架に苦しむ主イエスの姿が見えて来ます。

2 神の民の罪

さて、神の怒りが下り滅ぼされるエルサレム。ですが、エルサレムを都とするユダヤ人、別の言葉で言えば、イスラエルの人々は、神の民であり、エルサレムも神の都と呼ばれていました。そもそも、神はどうして数多くいる民族の中で、イスラエルの民を選んだのでしょうか。

申命記で、神の人、モーセは次のように言います。「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。神が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。」(申命記7：6～7)

この言葉は、神が私たち人間とは全く異なる方であることをよく示しています。もし、「天地万物を創造する全知全能の唯一の神」にふさわしい神の民を選ぶとするなら、当時の世界の超大国、エジプト帝国など隆盛を誇っていた民を選ぶでしょう。しかし、神はそうならなかった、全知全能のお方であるからこそ、神が強い民を選ぶ必要はないのです。どうやら、この聖書の言葉からすると、人間の弱さじたいは、罪ではないようです。いえ、却って人の弱さは、神が関心を寄せてくださるきっかけになりうるのだと聖書は語っています。

この言葉の通り、神は、エジプトで奴隷として使われ民族絶滅の危機にも瀕していた貧弱なイスラエルの人々を救い出し、豊かなカナンの地へと導き入れた、と聖書は語ります。この救いの経験を通じて、神の民イスラエルが形作られていきました。ですが、喉元過ぎれば熱さ忘れる、人は忘れっぽいもの。カナンの地に定着して生活が安定するとイスラエルの人々は、天の御神の言いつけを守らず、自分達のしたいようにします。神は心を痛め、幾人もの預言者を送り、ご自身のもとへと立ち帰るようにと、民に呼びかけ続けさせました。ですが、それでもイスラエルは頑なでした。御神は、アッシリアやバビロニアなど強大な国を興して、イスラエルを攻めさせ、遂には彼らの国を滅ぼす事までなさいました。ユダヤの人々は、国が亡びるという大きな試練を通じて、神に立ち帰り、「滅ぼす事の出来る神は、救う事が出来る神だ」という神の真理を見出します。しかし、それでも彼らは間違いました。今度はどう間違ったのでしょうか？

熱心なユダヤ教徒であった頃、主イエスと不思議な出会いをして、キリスト者とされた使徒パウロは次のように語ります。「**彼らは自分達の行いによって、救われると信じた**」。イスラエルの人々は、神の戒めを守るという自

分の行いによって、神との強い関係を築く事ができる、救われると考えました。やがて、そうできない仲間達を罪人として裁き排斥するようになります。これは、国際的に見てイスラエルが弱小の民であった事が影響しているようです。いつの時代も小さい群れは、自分達のアイデンティティを強調する事で共同体を守ろうと、排他的になる傾向にあるようです。ユダヤの指導者達も、押し寄せるギリシャ・ローマ文化圏の神々や文化、風習に呑み込まれて、神の民としてのアイデンティティを失わないように、殊更、自分達の律法や礼拝儀式を強調したという側面があったようです。そこには、「神の戒めを守れない者は神の民ではない。神の戒めを守れない弱さは罪だ」という考えが息づいているようです。彼らは、真実に神を求めているつもりでいました、しかし、気づかぬうちに自分達の強さ、自分達の正義を求めていた、そして、肝心の神を見失い、自分達を神としてしまうようです。

ユダヤの指導者達が、自分達を神としていた事は、洗礼者ヨハネと主イエスの登場した時に、彼らがとった態度から明らかです。彼らは洗礼者ヨハネが、ヨルダン川で「救いは近づいた。悔い改めて神を信じよ」と呼びかけた時も応じるどころか、彼を痛烈に中傷しました。又、主イエスが現れて、力ある言葉と御業で神の国を宣べ伝えても、指導者達は、逆に主の命を狙うようになります。主が、彼ら指導者達の欺瞞を遠慮会釈なく暴いたからです。「あなた達は、うわべは信仰深い態度をとるが、真実に神の御前に遜ってはいない。自分で自分を救えると確信し、自分を神としている偽善者だ」。主が真実を語っていたからこそ、指導者達は色めき立ち、主を捕らえてローマ軍に引き渡し、十字架に架けて殺させました。こうして、神が宝の民と愛した人々が、神の独り子を殺すという恐ろしい事が起こりました。ここに私達人間の罪の本質があるのだと思います。即ち、神を神とせず、自分が神となること。神のものを横取りする事こそ、罪なのだと言書は語っているようです。

その結果のエルサレム滅亡でした。紀元68年に火ぶたを切ったローマ帝国とユダヤ人との戦争。何度かローマ軍はユダヤ軍に敗退しつつも、圧倒的な数と兵器の力で、四方からエルサレムを囲むように進軍します。彼らは、エルサレムが堅固な城壁に囲まれ、山の上に築かれた町であったので、兵糧攻めにしました。四方の守りを固くし、食料を外部から市内に持ち込ませない、が、市街からエルサレムへと入る人々はわざと見逃したようです。そうして、エルサレム市内に籠城する人の数を増やし、飢えさせて降伏させようという作戦でした。ローマ軍の作戦は効果を上げます。ユダヤ人陣営が一枚岩でなかった事もローマ軍に有利に働きました。エルサレムに籠城した指導者達が内輪もめを始めたのです。そして、相手陣営の食糧庫に火をつける事

までしたそうです。追い詰められた時、人はその本質を顕わにします。神に愛された宝の民の姿は微塵もありません。神をなくした私達人間のありのままの姿です。

結局、エルサレムは、紀元後70年8月に陥落します。多くのエルサレム市民がローマ軍の刃に倒れました。その数、七万近かった、と言われていません。2000年前のエルサレムの人口が約5万と言われていたから、殺戮がいかにか徹底的に行われたかがうかがわれます。残り的人々は、捕虜となり、奴隷として世界中に散らされました。エルサレム市内の建物は、見せしめの為に幾つかの塔が残されただけで、他は徹底的に破壊されたようです。廃墟と化したエルサレムの瓦礫の山は、深い人の罪に対する神の怒りの大きさを表しているようです。

3 主の十字架

しかし、人の罪に対する神の怒りの大きさ、深さを真実に知りえたのは、エルサレムの人々ではありません。主イエスお一人であったでしょう。神の怒りと、その怒りの背後にある悲しみを真実に知る事ができるのは、父なる神の懐にいた神の独り子だけです。だからこそ、主は、エルサレムに入られる前に、オリーブ山からこの街が見えて来ると、立ち止まって声をあげて泣かれた、慟哭されました。主は、神の民の都が神の怒りの前に滅びゆく事を知っており、自分の事のように痛みに思っておられたのでしょうか。それは、この数日後、十字架に架かる前の晩、逮捕される直前、ゲツセマネの園で苦しみ嘆き、血の汗を滴らせて祈られた事からも分かります。主イエスは、ゲツセマネでご自身の滅びに恐れおののいて、苦しんでおられたのではありません。神の民が、神の独り子を殺す事によって、彼らが受けなくてはならない裁きの大きさを想い、苦しく悲しくていたたまれなかったのです。愛する者が裁かれて滅びる事が耐え切れない。だから、オリーブ園で「自分からこの杯を遠ざけてください」と血の汗をしたたらせて、祈られました。

この主イエスの滅びゆくエルサレムへの嘆きは、23節の「不幸だ」と訳されている言葉にも見えます。ここは「ウーアイ」というギリシャ語で、「胸つぶれる思いの悲しみや嘆きを表す言葉であり、「ああ、なんてことだ、なんて不幸なのだ！」とも訳せる言葉です。主イエスの嘆きは、神を見失った指導者達の故に窮地に陥り、逃げる事も難しい胎児や乳飲み子を抱えた女性達に向かっています。神に宝の民と言われた人々さえ、このような目に合うのです。まして神を知らない外国人はどうなる事でしょうか。

4 滅びの中に救いがある

しかし、主イエスの十字架と復活が起こりました。神のもたらす真実の救いは、他ならぬイエス・キリストの十字架、神の裁きのただ中にこそありました。神は、自分達の強さを求め、自分達が神になろうとする私達の罪を、主イエスの十字架によって裁かれ、滅ぼされます。そうしなければ、私達が神と共に生きる事はできず、救われる事がないから。真の救い、神を神として得られる真の平安は、十字架という滅びを経てこそ与えられる、と聖書は語っているようです。十字架の上で、私たちの罪の当然の結末である滅びを、神の独り子である主イエスが受けてくださり、徹底的に滅んでくださいました。私達は神ではなく、神から見れば神を神と出来ない者達なのであり、神は正しいお方である以上、裁きは避けられない、神の裁きなくして、真の救いもあり得ない、永遠の命への道もあり得ない。ですが、私達は神の裁きには堪ええない。だから、神の御子が神の滅びの裁きを一身に受けてくださいました。それ故に、私達は新しい命へと生まれ変わる事ができるのです。滅びの中に命をもたらす事ができるのは、神の独り子のみです。

これを分かりやすく、生活の言葉で語ることができたら、と願います。こうも言えるでしょう。イエス・キリストが自分の罪の為に十字架に架かってくださった、という事は、私達人間はもう自分達を神として生きなくてもよくなった、強く完璧な自分達でなくてもよくなったという事です。弱く情けない自分達の為にイエスキリストが十字架に架かってくださっている、だから、私たちはありのままの自分のままでいいのだ、という事です。しかし、非常に不思議な事ですが、イエスキリストの十字架の故にありのままの自分でよい、と知った瞬間、私達はもう強くなり始めている、変わり始めている、と言えます。

勿論、この強さは、人間の強さではありません。「キリストの弱さ」の内にある強さ。神の弱さは人間の強さをしのぎます。言葉を変えれば、自分をまるごと神のもとへ差出し、導きと助けを乞う、そうして神の愛を受け入れるしなやかな心と言っていいかもしれません。十字架と復活によって救われた命は、実にしなやかな心。神を神として求める信仰は、信仰深い自分しか受け入れられない堅くこわばった心ではなく、弱い自分でも、主イエスの故に受け入れるしなやかな心に根付き花を咲かせるのだと思います。だから、パウロは言います。「私は、弱い時にこそ強い。」

さて、冒頭の「弱さは罪なのか？」という問いに、今、私達はどう答えればいいのでしょうか。こう答えたいと思います。「弱いことそれ自体が罪では

ない。自分の弱さや愚かさを自分で何とかできると信じ、神を求めない事が罪なのだ。」

5 逃げなさい！

そのような主イエスはエルサレム滅亡預言の中で仰います。「エルサレムが敵軍に包囲されているのを見たら、ユダヤ地方にいる人は山に逃げろ。市内にいる人は退去しろ。田舎にいる人はエルサレムには入るな。」自分達の正義を追い求めるエルサレムの人々のもとには、真の救いはない、その時が来たら逃げなさい。真の神の独り子である私のもとに逃げなさい！と主は、弟子達に仰っています。この言葉から、主イエスがここでエルサレムの滅亡を語ったのは、弟子達が、私達が、エルサレム指導者達と同じ間違いを犯さないようにという警告の為であったという事がわかります。

主イエスが「エルサレムが四方を取り囲まれたら、逃げろ！」と言ったように、父なる神と主イエスは、教会に対して、実に具体的取るべき道を示してくださいます。このコロナ禍を通じても、教えてくださいました。ちょうど一年前の今頃、新型コロナの感染拡大の第一波が世界に襲いかかっていました。私は、受難週やイースターを控えて教会の礼拝をどうするか、悩み抜きました。最初は、皆で集まる礼拝を止めるつもりなどありませんでした。しかし、イタリアやフランスで、すごい勢いで人が亡くなり、教会じたいが閉鎖となった様子が伝わるにつれて心が揺らぎます。この状況で、皆で集まり礼拝を捧げたら、感染が広がり亡くなる方が出てこないとも限らない、それでイエス・キリストを証する事になるのだろうか。しかし、礼拝する為に集まる事は教会にとって最も大切なこと。ことにイースター礼拝を皆さんと共に捧げられないなんて！幾日も悩み、「どうしたらいいのですか！」と祈りました。そうした時に、ローズンゲン「日々の聖句」で偶然取り上げられていたのが、今日の聖書テキストでした。「主イエスは、キリスト者達に“過去の伝統にとらわれずに、逃げろ”と指示されていた。重要なのは目に見える形式ではないのだ、イエス・キリストの十字架の御許で、心開き、自分を低くし天の父なる御神を崇めて礼拝する事こそ、最も大事な事だ。皆が感染の心配をせずに安心して礼拝できるやり方を求めて行っていいんだ」と方針を具体的に示された思いでした。

天の父なる御神と主イエスは、時に応じて私達を導いてくださいます。弱く小さい私たちと、いつも共にいて、神を神として生きる事はどういう事かを、実際の私たちの問題について具体的に教えてくださいます。だから、私たちの希望は、徹底した滅びの中にも命の道を開いてくださる父なる神とイエス・キリストにこそあると知る事ができます。これこそ神の恵み。裁きの

中にある救いの道。「キリストにある弱さこそ恵み」です。イエス・キリストの十字架の中に切り開かれた救いの道を思い起こしつつ受難週を過ごしていきたいと願います。